



いっしょに歩こう！ プロジェクト

日本聖公会東日本大震災被災者支援

News Letter

第12号

2012年8月1日発行



△ '11/9/24 広畑仮設住宅 自治会女性部のみなさん（右）と



'11/3/12
避難所になった体育館



'11/7/23
仮設住宅での聖餐式



'12/3/11
磯山聖ヨハネ教会で祈る



'12/6/9
新地ベース開所礼拝

新地ベース開所

- 松本普
「新地2年目の歩み」
- 三宅信幸
「新地の、そして子どもたちの未来のために」

福島(仮称)ベース設置

福島聖ステパノ教会を拠点に活動開始

外国人支援は個別支援へ

石巻市、多賀城市、気仙沼市など

2012年6月、福島県新地町にいっしょに歩こう！プロジェクトの3つ目の現地拠点となる新地ベース「被災者支援センターしんち」が開所しました。（開所式の様子はニュースレター11号でも紹介されています。）今号では、1年間新地町といっしょに歩いてきたベース常駐スタッフと、行政の面からも今後の新地町を見つめる地元の方の声をお伝えします。

〈福島県相馬郡新地町〉



宮城県と福島県の県境にある海沿いの街。駅から海までは数百m、市街地は駅よりも海に近い位置にありました。

新地2年目の歩み ～私達は誰と一緒に歩いているんですか～

ミカエル 松本 普 いっしょに歩こう!プロジェクト「被災者支援センターしんち」担当スタッフ

去る6月9日、新地町役場が見える格好の場所で「被災者支援センターしんち」の開所式が執り行われました。当日は大雨にもかかわらず、仮設住宅の居住者をはじめ、第3及び第7地区の行政区長、新地町総務課長や町会議員、近隣住民、民生委員、それに宮城県からも、ふじ幼稚園、仙台基督教会聖歌隊及び信徒、いっしょに歩こう!プロジェクトの皆さんが多数参列してくださり、小さな多目的用ホールは入りきれない人であふれました。被災地・被災者の皆さんとこの日を祝い、「2年目のこれからも、ここ新地町でいっしょに歩いていきましょう」との想いを分かち合えた、そんな日になりました。

昨年の大震災以降、各地で取り組まれてきた支援活動のうち、新地での活動は、亡くなられた教会員3名のご遺族と、住居を失った教会関係者が生活をしている新地町内の仮設住宅を中心に、仙台から車で通いつづける1年でした。しかも往復で3時間も費やしてしまう新地での活動でした。他方私たちが訪問すると、いつも「こんにちは、いらっしゃーい」「今日は1人で?」「いつもご苦労さま」…とか、子どもたちと会えば「あっ!! まっちゃんだ」「今日遊べるの?」「勉強みてる?」…とか、帰り際には「帰りに野菜持って行って」「えっ! もう帰るの?」「今度はいつ来るの?」…と、そんな会話が自然に飛び交う関係がつけられてきた1年でもありました。



広畑仮設住宅入居者(右)と

しかし、よく考えてみますと、それは当初私たちの都合や物差しで作られたある意味、限定的、一方通行的関係や活動であったとも言えます。ただしそれは、緊急時には避けて通れない支援活動の初期の活動パターンであり、多くの面で「する側とされる側」というパターンで動いていきます。問題は、このパターンを〈いつ・どこで・誰が・誰と・どのように転換していくか〉ということです。このことに細心の注意と配慮を欠くと、キャッチボールしあう対等な相互・互助の関係に転換できず、「する側とされる側」という関係の固定化がますます進んでいってしまいます。

2年目は被災地・被災者の皆さんと、文字通り「いっしょに歩いていく拠点を新地町に創って行きましょう」という〈センター新地構想〉が、新地プログラム会議で協議されるようになったのは、今年の3月11日逝去者一周年記念礼拝が、被災した信徒宅跡地で厳粛に執り行われた頃からでした。その1ヶ月前の2月上旬には、東日本大震災一周年を目前に中間総括が提案され、また仙台オフィス開所礼拝から、5月で1年となる節目の時期とも重なっていました。

あれから早や1年と6ヶ月が経とうとしています。改めて被災されたすべての方々、ことに逝去された多くの方々とそのご遺族に想いを馳せたいと思います。日々の活動前に祈る「嘆願」には、プロジェクトのスローガンと活動方針が凝縮されています。この精神・理念に立つ時、ここ新地町での新たな活動を始めるにあたり、その精神・理念が大きく変わっていくことはありません。むしろその原点に、より近づきより明確になることになるでしょう。



「被災者支援センターしんち」のホール
地元の方やボランティアスタッフが出入りしている

プロジェクトのスローガンになっている「いっしょに歩こう」が具現化されていく、これが「被災者支援センターしんち」設置の最大の構想です。誰と「いっしょに歩こう」なのか。何処で「いっしょに歩こう」なのか。何をして「いっしょに歩こう」なのか。

「被災地・被災者の皆さんといっしょに歩いていく、新たな拠点でこの新地センター構想を実現しましょう」との本部長(加藤博道主教)の表明や、プログラムディレクター(長谷川清純司祭)が支援センターしんちのセンター長を兼務することになったことなどの経緯は、2年目に入った担当スタッフの1人として、大変心強く喜ばしいことと感謝せずにはおれません。プロジェクトスタッフの役割と責務を自覚しながら協働して被災者・被災地・被災教区で、日々刻々と変わるニーズに応えることができますよう豊かに用いられたいと思います。

新地の、そして子どもたちの未来のために

三宅 信幸 広畑仮設住宅自治会長・新地町町議会議員

昨年3月11日に発生した大地震では、「大津波が来る」との防災放送があり、毎年行っていた避難訓練どおり浜地区に向かいました。途中の道路は陥没し、橋は大きな段差が出来て行けず、迂回して行くと、屋根瓦は落ち、古い家は倒壊していました。一軒一軒声を掛け地区住民を福田小学校に避難誘導した後、磯山地区に戻り、地区で一番の高台に在り避難所に指定されていた磯山聖ヨハネ教会に避難するよう誘導しているとき、100m先の海岸にある高さ20mを超える松林の上から突然、白波が襲って来ました。大津波でした。すぐ目の前の自宅に辿り着けず、そこに居た母に声を掛けることも出来ず車をUターンさせ、津波に追われるように、2km先の国道まで夢中で逃げました。教会に避難した人々は小雪の降る中、火で暖を取り救助を待ちました。翌日、全員無事救助され、火を焚いた場所は今でも残っています。



しかし地区から母を含め8名の犠牲者が出たことは、残念で悔いが残ります。その後福田小校で避難所生活が始まりましたが、何も無く着の身着のままでの状態でした。地元の人達から寒さを防ぐ衣類、毛布、ストーブ、自家用として作った大切な野菜、米を支援して頂きその上、鍋、釜、薪類を持ち寄り長期間炊き出しをして頂きました。また、日本聖公会からは、海外を含め組織を上げて食料、衣類、その他様々な支援物資を頂きました。我々はこのことを生涯忘れることが出来ません。

2年目に入った現在、新地町に支援センターが設置され担当者が常駐し様々な支援をして頂いています。私は、地区長として被災した町民の声を行政に届けるために、昨年11月に新地町の町議会議員になりました。今、私達が直面している大きな課題は、子どもたちの未来と町の復興（放射能対策、防潮堤、農林水産業、上下水道や鉄道生活道路など交通網整備、集団移転事業、等）です。現在仮設住宅での避難生活を余儀なくされていますが、町民挙げて全力を注いでいるところです。

walknow!
いま どこを歩いているの？

プロジェクトが、どこを、誰と歩いているのか知ってほしい！
これまでご紹介したプログラムのその後など、現在の活動の様子をお伝えします。

■福島市（福島県）／福島（仮称）ベース設置

6月末の運営委員会で7月より福島市に新たなベースを設置することが決定。福島聖ステパノ教会を拠点に活動していく。以前より福島にベースを置いた活動を重要視する声はあったが、放射能の影響など難しい問題があり、慎重に論議を重ねてきた。ベース長は影山博美司祭（福島聖ステパノ教会管理牧師）が勤め、谷昌二主教（前沖縄教区主教）が毎月3週間ほど福島に滞在し協働していく。活動の本格化を前に近隣の仮設住宅との関係づくりや、みその幼稚園との連携が始まっている。



■石巻市（宮城県）／外国人被災者個別支援

石巻市には外国から嫁いできた400名を超えるといわれる女性が暮らしているが、日常生活そのものに関わる問題を抱える人々が多い。例えば滞在ビザ、就労、婚姻、子ども等プライバシーに関わるものが多く、個々に丁寧なサポートが必要とされている。

また多くの家庭に子どもがいるが、大半の外国人の母親たちは言葉の問題で子どもに勉強を教えることが難しい。そのためプロジェクトでは個別に母親の支援をするだけでなく、継続して小中学生の宿題を手伝ったり、夏休みなどの長期休暇には仙台在住の大学生ボランティアを募り、外国人の子どもとその友だちを対象にした学習支援プログラムを行っている。



仮設支援

- ◆体操プログラム／釜石市（上中島仮設）
- ◆買い物バスツアー／名取市（箱塚桜団地）
- ◆お茶会、バザー／新地町（広畑仮設、がんご屋仮設等）
- ◆ほっこりカフェ（日本同盟基督教団他と協働）／いわき市（泉玉露仮設、渡辺町屋野仮設、昭和園仮設）
- ◆平七夕まつり準備／いわき市（渡辺町屋野仮設）

その他にも…戸別訪問、じゃがいも配り、お菓子作り教室、手芸教室、折り紙・絵手紙教室、ピザ作り、仮設掃除

障がい者支援

- ◆買い上げ支援／仙台市（まどか）、気仙沼市（ひまわり）
- ◆作業補助、看板製作／気仙沼市（ひまわり）
- ◆婦人会協力のひまわりクッキー買い上げ支援の経過報告のため日聖婦会会長出席／横浜聖アンデレ教会
- ◆まどか新作業所開所

津波により施設が全壊した仙台市若林区荒浜の通所作業所「まどか荒浜」が、6月25日に仙台市太白区の新作業所に引っ越し、「まちの工房 まどか」と名前を改めて活動を開始した。震災から1年以上間借りをして活動してきた福祉施設からも程近く、通所者にとっては通いやすい地域での再スタートとなる。これまでのまゆ細工に加え今後はパンの製造販売、シルクスクリーン印刷なども行う。7月21日に開所セレモニー。



外国人支援

- ◆手作りプログラム／南三陸町
- ◆個別支援（子ども達の学習支援、市役所、職業安定所への付添いなど）／石巻市、南三陸町、多賀城市
- ◆英語講師養成講座／石巻市、南三陸町、多賀城市
- ◆食品などの放射線量検査（日本キリスト教団エマオに依頼）／福島市

その他

- ◆建て替え工事中の仙台基督教会の荷物運び入れのためボランティアベース「ナザレの家」片付け／仙台市
- ◆青葉静修館改修工事終了

2012年5月より行ってきた耐震および改修工事が6月に完了した。長年、東北教区の修養会や黙想会の会場として活用されてきた施設だが今後はボランティア活動・視察等の拠点として、また、リフレッシュプログラムでも利用していく予定。（※リフレッシュプログラムとは…放射能被害により、屋外での活動等が制限されている方が一時的にその土地を離れ過ごすためのプログラム）



- ◆岩手県 ◆宮城県 ◆福島県内の活動を示します。紙面の都合上、掲載されていない活動もあります。詳細は各ベースのブログをご覧ください。ホームページ：<http://www.nskk.org/walk/>

コラム あの日の時、この人と。

②子ども達の絵

外国人支援の一環として、他団体と協働しながら「英語教師養成講座」を岩手、宮城、福島県各所で行ってまいりました。震災で職を失い、新たに英語のスキルを生かす仕事を始めたいけれど、教え方を知らない外国人のための支援です。

先日、プロジェクトの仙台オフィスを会場に講座が開催された時のことです。お母さんたちが受講している間、別室で4人の子どもたちが遊んでいました。2人の女の子が絵をかいています。「ここがー、〇〇ちゃんのおうち！」「* *ちゃんのおうちは、これ！」「〇〇ちゃんのおうちはねー、つなみがこないの！高いところにあるから。* *ちゃんのおうちもこっちがいいんだよ、つなみがくるよ」津波の被害に遭った地域に住んでいた受講生の子どもでした。去年の3月はその目で津波を見ていたのかもしれませんが。以前、南三陸町では2歳の男の子がレゴで「かせつじゅうたく」を作って遊んでいたこともありました。子どもたちはその小さな体と心で大人とは違う感性をもって震災と向き合い続けているのを感じました。

(2012年6月 仙台圏ベーススタッフ)



いっしょに歩こう！プロジェクトニュースレター第12号 2012年8月1日発行
 「いっしょに歩こう！プロジェクト」事務局 OPEN 月～金 10:00～17:00 CLOSE 土・日・祝
 〒980-0803 宮城県仙台市青葉区国分町3-4-5 クライスビル 2F TEL:022-265-5221 FAX:022-748-5321
 E-mail: walk@nskk.org ホームページ: <http://www.nskk.org/walk/>